

——〔八凸〕の註<sup>三</sup>を参照。<sup>五</sup>放送——罪人を放免すること。

〔二八二〕海印軒<sup>一</sup>に題す

無塵禪寂の地 関<sup>かん</sup>閉<sup>び</sup>じて人行<sup>じんぎやう</sup>少<sup>すく</sup>なし 井<sup>い</sup>は澈<sup>せき</sup>く茗<sup>みやう</sup>を烹<sup>ひ</sup>るに宜<sup>よろ</sup>し 窓<sup>まど</sup>明<sup>あ</sup>るく経<sup>きやう</sup>を誦<sup>じゆ</sup>すべし 花<sup>はな</sup>塔<sup>たつ</sup>  
は碧<sup>せい</sup>苔<sup>たい</sup>に鎖<sup>さ</sup>され 竹<sup>たけ</sup>徑<sup>ぢやう</sup>に白<sup>はく</sup>沙<sup>さ</sup>平<sup>へい</sup>らかなり 軒<sup>のき</sup>外<sup>がわ</sup>に滄<sup>そう</sup>海<sup>かい</sup>翻<sup>ひん</sup>り 魚<sup>いさな</sup>竜<sup>りゆう</sup>磬<sup>けい</sup>の聲<sup>こゑ</sup>を聴<sup>き</sup>く

一海印軒——妙樂寺所藏の『石城山什物之写』によれば、同寺の塔頭に海印庵がみえる。あるいはこれか。  
二塔——階に同じ。三磬——寺で勤行の時に打ち鳴らす金屬製の板。

〔二八三〕断過寺<sup>一</sup>にて懷を咏ず

去年遼左<sup>一</sup>にて秋風<sup>しゆふう</sup>に遇<sup>あ</sup>い 《丁酉<sup>ていしゆう</sup>秋、入朝<sup>にっしやう</sup>して遼陽<sup>りやうやう</sup>を過<sup>か</sup>ぐ。》 今日<sup>けふ</sup>遨遊<sup>がうゆう</sup>す滄海<sup>そうかい</sup>の東 歳々の良晨<sup>りやうしん</sup>に  
長<sup>なが</sup>く客<sup>きやく</sup>と作り 帰<sup>かへ</sup>を思<sup>おも</sup>えば吟裏<sup>ぎんり</sup>に鬢<sup>むすぶ</sup>飄蓬<sup>ひょうほう</sup>たり

一遼左——中国の遼東地方。朝鮮と境を接する地で、朝鮮から北京へ行く際は、必ずここを通る。二丁酉——永樂十五年、太宗十七年（一四一七）。三遼陽——中国遼寧省遼陽市。遼代の東京。遼東の中心都市。

四良晨——よい季節。

〔二八四〕四日夜<sup>（八月）</sup>老元帥原義珍<sup>一</sup>来見<sup>き</sup>す 五日夜<sup>（八月）</sup>新探提原義俊<sup>二</sup>来見<sup>き</sup>す 義珍

義俊<sup>よしのぶ</sup>皆<sup>みな</sup>村<sup>むら</sup>に居<sup>ゐ</sup>し我<sup>われ</sup>れに見<sup>ま</sup>えんと欲<sup>ほ</sup>して則<sup>すなは</sup>ち入<sup>い</sup>来<sup>き</sup>するなり 我<sup>われ</sup>れ  
の去<sup>い</sup>来<sup>き</sup>に二人<sup>ふにん</sup>相<sup>あ</sup>見<sup>み</sup>するは皆<sup>みな</sup>夜<sup>よ</sup>初<sup>はつ</sup>更<sup>げ</sup>なり 未<sup>な</sup>だ其<sup>その</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>を知らず

侏儻<sup>しゆたう</sup>の言語<sup>ごんご</sup>に斑衣<sup>はんい</sup>を著<sup>ちやく</sup>し 壁<sup>かべ</sup>に掛<sup>か</sup>くる燈籠<sup>とうろう</sup>は板扉<sup>いたひら</sup>を照<sup>て</sup>らす 華<sup>わ</sup>人と礼<sup>らい</sup>見<sup>み</sup>するに白昼<sup>はくぢゆう</sup>を休<sup>やす</sup>め 夜  
中<sup>ちゆう</sup>相<sup>あ</sup>会<sup>い</sup>すその意<sup>い</sup>知<sup>ち</sup>り難<sup>がた</sup>し

一老元帥原義珍——〔五凸〕の註<sup>三</sup>参照。二新探提原義俊——〔五凸〕の註<sup>四</sup>参照。三夜初更——午後八時頃。四侏  
儻の言語——蛮国の音楽のように解しがたい言葉。五斑衣——〔三七〕の註<sup>一</sup>参照。

〔二八五〕六日僧蘇禪<sup>一</sup>予<sup>二</sup>を家に請<sup>こ</sup>いて尊<sup>そん</sup>を開<sup>ひら</sup>く

吉久殿<sup>きちく</sup>・宗金<sup>そうきん</sup>帰<sup>かへ</sup>りて在<sup>あ</sup>り。予<sup>われ</sup>朴<sup>はく</sup>加<sup>か</sup>大<sup>たい</sup>に回<sup>かえ</sup>り来<sup>き</sup>り、小<sup>せう</sup>二<sup>に</sup>殿<sup>でん</sup>に見<sup>ま</sup>えんと欲<sup>ほ</sup>するも、  
未<sup>な</sup>だ二<sup>に</sup>殿<sup>でん</sup>のこれに對<sup>たい</sup>するの如<sup>ごと</sup>くを知らず、命<sup>いのち</sup>を辱<sup>は</sup>しむるを恐<sup>おそ</sup>るるなり。二<sup>に</sup>殿<sup>でん</sup>

と交わる所の宗金三をして、帰ゆきて二殿の意を見さしむ。宗金曰く、「吾れ前日歸ゆきて二殿に見ゆるに、二殿言う、「官人ここより回かえりて我が言を殿下に奏するならば、則ち我れ官人と見えん」と。また言う、「朝鮮の殿下、宗貞茂五と和好すること久し。去年馬島の兇輩辺鄙に侵犯せり。朝鮮の殿下、乃ち其の兇輩の事は置きて勿論可なり。都々熊丸をして其の輩を執とらえこれを罪せしむるもまた可なり。殿下既に此の如くせず、乃ち去年六月に於て馬島に行兵せり。若し馬島勝たずんば則ち其の島滅びん。今吾れ一岐等の処に兵船を請わば、則ち三百余隻、一朝にして集まるべし。其の船を朝鮮に送り、人民を殺掠し五六の州郡に放火せば、則ち吾が胸小快ならん。然れども兩國使臣往來の時故ゆゑ為さざるなり。また一岐・馬島の間に於て、一二船を送りてこれを要ととめ、今使臣回帰の時、執えて其の跡を滅すべきなり。然るにまた為さざるなり」と。予曰く、「小二殿、其の一を知りて未だ其の二を知らざるなり。向者宗貞茂我が殿下に向いて誠を至いたし礼を尽す。我が殿下其の誠心を知り、其れに米布を給うこと前後算なし。酒肉に至るまで皆これを与う。聖恩深重、二十余年一家為るなり。去年の春、馬島の賊輩上国の辺鄙に侵犯し、人民を殺掠し兵船を盗み帰る。过将啓聞するに、我が殿下震怒す。字小の心ありと

雖も、其れ置きて問わざるべけんや。また何の暇ありてか熊丸七をしてこれを罪せしめんや。是を以て兵船を送りてこれを伐ちしなり。今二殿若し其の使臣を殺し、また馬島の小集鳥合の船を以て大国を陵犯せば、則ち大国必ずや大いに兵を挙げてこれを伐たん。此の如くんば則ち馬島に遺類なからんこと必なり」と。宗金・蘇仙八・吉久殿、皆唯々たり。

一この〔二四〕節は、題と序のみあってそれに対応する詩を欠いている。二蘇禪——未詳。三金——底本全に作る。意によって改む。四殿下——朝鮮国王。五宗貞茂——都々熊丸(貞盛)の父。一四一八年死去。六过将——过は過の俗字。辺将の誤記か。七熊丸——都々熊丸。八蘇仙——蘇禪と同一人であろう。

〔二五〕(八月) 七日の即事

予、小二殿其の事を数えて向むかに本国に説き、報復を為さんと欲するの言を聞く。予、利害を列挙してこれを解説す。孔達・仁輔皆曰く、「宜よろしく黙して去るべし」と。予の解説を以て非とす。故に書して二子に示す。

人臣は且しばくも身の全きを計る莫なれ 夷險にも移らざりし古賢多し 誰か識る朝鮮遊説の子 秋

風に双鬢の雪のごと飄然たるを

〔二八六〕<sup>(八月)</sup> 十三日馬島主小二殿の言を聞く

六日、予、宗金に見え、小二殿の本国に向いて忿怨報復の言あるを聞く。予、歴挙してこれを解説す。二殿これを聞き、僧伴八尋長門を送る。長門来り言り、「朝鮮馬島に行兵せし後、二殿其の忿心を発し、今に至るも未だ平らざるること、宗金の言の如し」と。予、歴挙してこれを解説すること、宗金への対の如し。長門曰く、「官人の言、一として然らざるはなし。乃ち馬島は朝鮮の門の如く、また朝鮮の城の如し。朝鮮は宜しく保恤を加うべし。我が二殿もまた和好を修するを願うなり」と。

馬島に行兵して主倭驚き 傑驚の頑心尚未だ平らがず 分に安んじ天を畏るれば言聴き了り  
和好を修して余生を樂しむを願う

一 僧伴八尋長門——未詳。ニ 保恤——保護し援助すること。三 傑驚——あばれもの。

〔二八七〕<sup>(八月)</sup> 十四日断過寺に懷を書す 二首

一年の佳節是れ中秋 怪底相逢う碧海の頭 王事に人臣まさに未だ鹽からざるべし 僧窓にて  
月に対い独り愁を含む

遠遊すれば愁思は 倍悠々たり 佳節に殊方にありて楚囚に似たり 想い得たり京都の今夜の  
月に 幾多の人の最高楼に倚れるを

〔二八八〕 断過寺にて中秋の雨に

客裏に中秋を石城に見る 僧窓板屋に雨浪々たり 皇天我れに殊方の恨を為す 雲は青空を掄  
いて月生れず